

青木資料をいただいた時の話

千葉菌類談話会会長 腰野 文男

1987年、私が県立中央博物館の準備室に勤め、植物やキノコの写真を撮ったり標本を作ったりするようになったのは今から20年も前になる。その頃キノコの研究の座右にあって、はなす事の出来なかったのは、本郷図鑑と1988年に発行になった日本のきのこ（写真図鑑）であった。いずれも名著だが、胞子などの顕微鏡図があるのは本郷図鑑だけであった。

1989年、今の県立中央博物館がオープンして大分たった頃、月日は覚えていないがある日吹春さんから見せていただいたものが青木図版のコピーであった。その実物にもとづいた正確な図や実に詳細な顕微鏡図と記載は、唯々驚くばかりですごい図版だという印象が強かった。しかし当時作者の青木実氏（以下青木さん）を知る資料は何も手元にはなく、わずかに吹春さんの恩師である相良直彦先生の“日本きのこ図版 1000号突破（日菌報1978）”という一文があるだけであった。したがってこんなすばらしい図版を書いた青木さんとはどんな方なんだろうと思いつつも、そのプロフィールはわからず終いとなっていた。

そんなある日、青木さんから千葉菌類談話会宛に一通の手紙をいただいたのである。手紙の内容の詳細は省略するが、おおむね……青木さんのキノコ研究は1994年（70歳）の時に終わったので、キノコ関係の資料等を全部差し上げるので引き取って欲しい……という事で、自宅までの地図まで添え書きしてあつ



青木実氏（左）と筆者

た。日付は1997年8月18日となっていた。思いもしない突然の申し入れでとまどったが、吹春さんと相談の結果ともかく一度お会いしてみようという事になったのである。

それから数ヶ月たった1997年（平成9年）12月3日、吹春さんと私の両名で所沢市緑町にある自宅を訪れる事になった。青木さんのお住まいは細長い感じの部屋で、玄関から右側の壁面に添ってキノコ関係の資料と邦書が書棚に整理され、左側の壁面に添ってはテレビとタンスが配置され、その奥にキノコ関係の外国書がいずれもよく整理されて整然とした感じであった。青木さんとはこれまで全く面識がなかったので、初対面の挨拶の後、今回いただける事になったキノコ関係の資料・写真・標本・顕微鏡・カメラなどの機具類・図書の類を一通り見せていただき、後日、日

を改めて宅急便等で送らせていただく事になった。一休み後の雑談のなかで、青木さんからいろいろな話を伺う事ができた。当日の日記の中からいくつか次に引用してみよう。

なぜキノコを研究するようになったのかというと、すべて自分のためにした事で、キノコを研究していないと苦しくて苦しくてしょうがないので研究に没頭したという。仕事もキノコの研究がしたいので、休みがとれる公務員の衛生研究所選んで就職した。給料は安く、職種も雑用係で作業員補助という事であったが、それでも東京都の衛生研究所に勤めてから思う様なキノコの研究が出来るようになった。出勤前の朝 7 時までにはキノコの採集・顕微鏡による観察・写真撮影等、すべて生のままで処理してしまい、勤めが終って帰宅してから描画・記載等、研究に終始したという事である。70 歳をむかえる頃になって研究もまとまり、出来る範囲が終った様に思うし、今はキノコを研究しなくても苦しくないともいっていた。高齢になると高名な学者でも同定したキノコの名称が曖昧だった例がある。そこで自分のためにしてきたキノコの研究なので一切やめる事にしたといい、千葉菌類談話会に資料など全部もらってくれればという手紙を出すまでのいきさつを熱心に話された。

そして一息つくとベランダからコケの鉢を持ってきて、今はコケに興味を持って毎日観察を続けているという事であった。打ちつけてきたせいもあってお酒好きの話まで出たが、キノコの研究は生のままでなければだめと再度強調されるお顔から青木さんのキノコに対する執念を感じずる事ができた。話はずんだが時間も大分経過したので、その日は、次に業者等に連絡してから伺う事を約束して、お宅を辞する事になった。

2 回目に伺ったのは、1998 年（平成 10 年）2 月 15 日で、その日は生憎の雨でそれが途中

雪に変わって、所沢市の駅につく頃はかなり積もっていた。それでも何とか約束の時間までに伺うことが出来た。青木さんはすでに発送の準備をすませて、荷物はすっかりダンボールにつめて荷札まで用意されていた。荷物が集荷するまでは当方の責任という青木さん一流のお考えもあっての事だったが、意外にも早く宅急便の業者が来て発送する事が出来た。発送後部屋の中は何となくがらんとした感じとなり、図書の類も辞書が数冊残っただけの様で如何に青木さんがキノコの研究に没頭していたかを物語るように思えてならなかった。一息つくと打ちつけた雰囲気もあって青木さんからまたいろいろな話を伺うことが出来た。例によって当日の日記の中からいくつか次に引用してみよう。

前回の話を補足する様にしてくれた、なぜキノコを研究するようになったかという話

青木さんの兄さん達はいずれも頭がよくて、次男の兄は一橋大学出で三男の兄は一橋大学の教授をしており、大学を出ていないため相手にしてくれなかったという。そのために兄とは長い間交流がなく、未だにつき合っていないとの事である。そういう対抗意識をキノコの研究に没頭していないと苦しかった要因の一つであったかも知れないといわれた。

キノコ研究についての話

本郷図鑑を見ても分かると思うが、本郷先生の研究は目で見られる範囲を限度にしている様に思える。私（青木さん）の研究は顕微鏡でなければ分からない範囲を対象として研究をすすめていったという事である。しかし学問上のルールに反している点があって、学者からは異端視された。今関六也先生からも提出した論文が定説と異なるというので採用されなかった、という話をされた。富士氏のように承諾もしていないのに共同研究者として名前が載っていた事もあった。しかし私の場



千葉菌が預かった青木実原版

合、他の研究者の様にキノコの研究を本にしたり自分の名声を高めたりする事は一切なく、キノコ研究しないと苦しいからやった、という事を青木さんは力説された。

話がはずんで今の生活におよび、青木さんの された酒の話

酒は1日4回位飲むが、つまみはセロリに砂糖をまぶし酢をかけたもので飲む事が多い。焼酎も酒も上物でなく何でもよい。ご飯は数

える程しか食べておらず殆ど酒と焼酎を飲んで過ごしている、といいながら甲類で無色な焼酎の大ビンを見せてくれた。商品も一度買ったものは二度と同じ物は買わない、といいながら見せてくれたノートには、何と酒や焼酎はじめチョコレート、ウォッカ、せんべい、ちくわにいたるまで、銘柄・規格・価格まで克明に一覧表がつくられており、その上商品のレettelまで貼り付けてあるではないか。これにはまたまた驚くばかりで根っからの分類好きといわざるを得ない。

青木さんが強く言われた事

キノコ関係の資料や機具・図書など、千葉菌類談話会にくれた以上もはや私とは関わりはなく、出版しようと何しようと一切好きにして欲しいという事であった。

これで2回目の訪問を終わり帰途につく、と当日の日記に記してあった。

青木さんからいただいた図版・検索表・その裏付となる写真・標本・機具類・図書など、どれをとってもキノコの研究上重要な資料である。その一切をまかせられただけに、千葉菌類談話会としてはどう取扱うべきか迷うところで苦慮せざるを得ない。恐らく学者だったら自分の名声のために利用こそすれ生涯をかけた労作をぼんと差出すことはないだろう、と思いは複雑である。幸いにしてその後、青木さんと関わりをもった浅井郁夫さんはじめ関係の方々の熱意とご努力によって検索図版が出版配布された事は、キノコ研究の上で重要な資料だけにまことにご同慶にたえません。